

「善いって？」

「だって、あやちゃんには頭脳があるやん。大学予備コースのエリート候補生なんやもん。ひとには、向き不向きがあるんよ」

「そうやか？」

柔らかな方言を操る弟が眩しくて、わたしもその響きを真似てみる。

わたしは昔から、方言をあまりうまく操れない。「あやちゃんは言葉が綺麗」。友人たちから云われるたびに、括弧つきの『標準語』を信用できないわたしについてはコンプレックスを刺激されることだった。

「そうよ。僕なんか、どうやって、大学予備コースとか入れんもん。あやちゃんは勉強に向いとうんよ」純が微笑む。

その代わり、心の中だけでひとりごちる。

その代わり、生きることにはからきし向いていないけれどね。生への善性のエネルギーに満ち溢れた、天使に祝福された、君と違ってね。

たしかに純の成績は善いとは云えないかも知れない。幼児健診で選抜されて、ずっと中央のエリート候補生として過ごしてきた姉がいるわりには。

だけど、それがどうしたと云うのだろうか。

純は生に向いている。それだけでも、純のいのちは、頭脳だけのわたしのいのちなんかよりも、よっぽど価値がある。

純が不治の病になった。

余命、ひと月だと宣告された。

わたしは誰よりも——おそらくは純本人よりも、酷いショックを受けた。塞ぎ込んだ。

うすうす気づいていたことだけど、この世界には、神さまなんていないのだ。

いるなら、純を選んだりはしないはずだ。

わたしを苦しめたのは、何故、選ばれたのが純であって、わたしではないのか、と云う単純なことだった。わたしの生の方が純の生よりは、よっぽど価値が低い。

未来を奪われるのなら、それはわたしであるはずだ。純には溢れるばかりの耀ける未来が待っていて然るべきなのだ。

こんな中途で断ち切られて善いはずものではないに決まっている。

何時ものように、無駄だと思いつつも、祈らずにはいらなくてわたしはとうに擦り切れてしまっているような祈りの文句を口にしていた。

「どうか純を助けてください。どうかわたしを身代わりにして」

神さまがいると云うのなら、叶えてくれるはずだ。

「どうか純を助けてください。どうかわたしを身代わりにして」

何度目かに、呟いたときだった。俯いて、眸を閉じているわたしの頬の辺りで、何らかの光源が灯って、

そして織い声かした。

「その希い、叶えて差し上げても善いですのよ？」

眸を開けると、声に違わぬ、織つこくて、小さい生き物がそこにいた。

「ほんとう!？」

「少しも愕いてくださらないと拍子抜け致してしまいますわね」

「お前が小鬼でも、純を救ってくれると云うのなら、構わないの」

「安心していただいて、だいじょうぶですのよ？ 小鬼なんて、怪しげなものではございませんのよ。わたし、神さまにお仕えする小妖精、ボービーブと申しますの。はじめまして。以後、お見知りおきを」

「小妖精？ ほんとうに純のいのちを助けてくれるんでしょうね？」

ボービーブは全体的にうす碧い小妖精だった。うす碧いモスリンのドレスを着ていて、大変に美しい様子をしていた。半透明の羽もうす碧い色をしている。

「ええ。助けて差し上げますわ」

「完治するのね？」

「ええ。完全に」

「代償は？」

訊くと、ボービーブは莞爾とする。

「あなた様のおいのち。あなた様のおいのちを神さまに捧げることで、弟御のおいのちをお救い申し上げます」

「上等だわ。それで、どうやるの？」

ボービーブは指を鳴らす。パチン。

目の前の机に、青銀の折り紙の山が現れた。

「これは、神さまの息吹よりできた特別な折り紙ですの。千枚、ございますのよ。一枚も無駄にすることなく、これで千羽鶴を折り上げなさい。一枚、折るたびに、あなた様のいのちの雫がこの折り紙に移ります。千羽鶴を折り上げたなら、裏の祠に奉納します。するとあなた様のいのちの雫はすべて喪われ、弟御に与えられます。やりますか？」

「勿論、やるわ」

それから、わたしは折り鶴を折るのに熱中した。

一枚も無駄にしないように、慎重、正確、かつ丁寧に。

- 01・折り紙を用意します。
- 02・斜め半分に折ります。
- 03・更に半分に折ります。
- 04・三角部分を開いてつぶします。
- 05・反対側もつぶします。
- 06・開いてる方から三角に折ります。

- 07・反対側も同じように折ります。
- 08・上三角部に折り目をつけます。
- 09・広げてつぶします。
- 10・反対側も広げてつぶします。
- 11・きれいに合わせます。
- 12・開いた側から半分に折ります。
- 13・反対側も折ります。
- 14・重なる部分を両方とも広げます。
- 15・首と尻尾になる部分を起こします。
- 16・反対側も起こします。
- 17・出来上がり。

ボーピーブの云ったとおり、一枚、折るたびに軀中の力が喪われて行くのが判った。半分、折り上げた頃には、わたしはもうへろへろになっていた。

だけど、うれしかった。その分だけ、純の生が確実になると思えたから。

六日目の夜、千羽鶴は完成した。さっそく、ふらつく脚で、裏の祠に奉納しに行った。

戻ると、ボーピーブが現れた。

「伝えないのはフエアちゃんいですから、参りましたわ。すべてを帳消しにしたい場合には、千羽鶴を解くことですよ。このままにした場合、あなた様のいのちの雫は、日付が変わると同時に、弟御に移り、あなた様の生は喪われてしまいますのよ」

「望むところよ」

吃驚するほど弱々しかったけど、きつぱりとわたしは云う。

頸を竦めながら、ボーピーブは消えた。

日付が変わるまで、あと数分になっていた。わたしはベッドに倒れ込んだまま、指先ひとつ、動かせず、けれども、深い満足感に満たされていた。わたしはベッドに倒れ込んだまま、指先ひとつ、動かせず、くだらないとしか、思えなかったわたしの生が、もうすぐ役に立つのだ。今まで、生きていることには罪悪感しか、感じられなかったのに、今は深い充足を感じることができた。

そのときだった。部屋に純が駆け込んできた。右手にはボーピーブ、左手には——おそろしいことに、青銀の千羽鶴が握られている。

「悪いけど、あやちゃんの厚意は受けられない。話はこの小鬼に聞かせてもらった」

「小妖精ですよ」

「ひとをたぶらかすのは、小鬼さ」

クロティルドはディタンジュは、庶民の娘だった。だが、幾つかの幸運な——結末から考えると不幸な、誤解から、身分のある身としてブッカブルク伯爵に見初められて、伯爵の後添えとなった。結婚初日、ふたりはクロティルドの親友アンを訪れた。伯爵はクロティルドのような身分のある娘にアンのような庶民の親友がいるのは解せないと思っていたが、クロティルドの美点なのだ——つまり寛容さの発露と云う点で、と解釈していた。

*

到着早々に事件は勃発した。

アンの息子が池に落ちたのだ。

クロティルドも伯爵も池に飛び込んだ。

その際に、ブッカブルク伯爵は見てしまった。クロティルドが多くの貴族の娘がスカートの下に穿いているような大仰なベチコートを穿いていないこと。それどころか、まるで庶民の娘のような下着をつけたただと云うこと。

*

それらを見て取ると、伯爵は自分が騙されていたことを——もとよりクロティルドには騙そうと云う心算、なんて毛頭なかったのだが、悟った。

結婚前には健気で不憫だと思っていたクロティルドの態度さえも、今になってみると腹立たしかった。

「実家に挨拶に行かなくて善いのか？」

と伯爵が尋ねた際に、クロティルドは哀しげにその美しい面を伏せて、

「実家とは、折り合いが悪いのです」

とうち明けたのだった。

*

「お前は庶民の娘なのか!? どう云うことだ!？」

伯爵は声を荒げた。

クロティルドは濡れそぼったまま俯いた。

「申し訳ありません。云いそびれてしまったのです」

「今から結婚をとりやめるわけにも行かないし、」

「申し訳ありません」

*

それから、クロティルドにとっては——そしておそらくはブッカブルク伯爵にとっても、悲劇的な生活がはじまった。伯爵はクロティルドを憎々しく思っていて、常にクロティルドの一举一動に眸を光らせており、何かにつけてクロティルドを責め苛み、虐めるのだった。

「クロティルド、麵麩はふんわり焼いてほしいって云っているだろう？ これだから、庶民は」

「申し訳ありません」

クロティルドはしかし、よく、これに耐えた。

*

そうして、七年の歳月が流れた。

ブツカブルク伯爵の三人の連れ子も——クロティルドが後添えに入ったころはごく幼かったが、今や、上の男の子、ユース・ブツカブルクは十三、下の双子の女の子、メアリーアンとスー——ツインデビスとセツトで呼ばれることが多かった、は十になっていた。

ツインデビスは——女の子らしい憧れも手伝って、若く美しいクロティルドに懐いていた。しかし、ユースだけは——父親を尊敬するあまりに、クロティルドを軽蔑していた。

*

ところで、わたしたちは伯爵の社会生活についても見ておく必要があるだろう。伯爵はエディンバラ校の顧問をこの二十年あまり、務めてきていた。とても堅い、エリート教育で有名な貴族の子弟が通う私学である。伯爵の子どもたち——ユースとツインデビス、も、勿論エディンバラ校だった。

しかし、今、エディンバラ校の理事会では、伯爵を罷免しようとする動きがあった。まだ水面下のこと。

伯爵にこの動きを知らせを警告する親書が出されたところだった。だが、伯爵はちようど避暑に行っており、手紙を受け取れなかった。手紙は転送された。

だから、伯爵の手に渡るのは、少しく後のことになる。

*

伯爵一家が避暑に訪れるエディンバラ郊外の田舎家に、この夏、許されてロイド子爵と云う青年が滞在していた。

ロイド子爵は、年の頃、二十八。二十六になるクロティルドに片恋をしていた。伯爵がクロティルドにつらく当たるのを見るに耐えなかった彼は早々に帰り支度をしながら、クロティルドに詰め寄った。

「僕にはあなたが判らない！ 伯爵があなたと云う美しくも彼には不釣り合いなほどに若い妻を得ておいて、おお神さま、それに感謝するどころか、あなたを粗略に扱っていると云う話は近所の噂話として聞き知っていた。けれど、まさかあなたに限って、そう云う扱いを受けて善いはずがないと僕は思っていた。だから、噂話も信じなかったんだ」

馬車の中でも、彼は云い募った。クロティルドはただ、うち笑み、耳を傾けていた。

そのクロティルドの冷静な態度は、ロイド子爵の昂奮と好対照を為すものだった。クロティルドが冷静に応じれば応じるほど、ロイド子爵は激昂して行くのだった。

「だけど、現実はどうだ！ 伯爵はどの瞬間もあなたを酷く粗略に扱っている。いや、〈粗略に扱っている〉

なんて、可愛いものじゃない。あなたにつらく当たっている。まさしく暴力だ！ あなたは虐待されているようなものだ！」

馬車は駅に着いた。

クロティルドは一礼して帰りかけたが、ロイド子爵はそんなクロティルドを押しとどめて懇願した。

「あ行かないでください、お願いだ！ この胸の内の苦しい想いを聞いて貰わないうちは、僕は帰るに帰れない。あなたをあの人非人の元へは帰したくない！ どうか此処に居るとおっしゃってください！ せめてこの汽車が出るまで！」

青年のパトスは、クロティルドを根負けさせるに充分だった。

クロティルドは云った。

「判りました、判りましたわ、居りますわ。だからどうか、落ち着いてくださいな」

「ああ美しいひと、聞いてくださると云われるのか！」

「汽車が出るまでのあいだ、ですわ」

クロティルドはロイド子爵と共に、コンパートメントに乗り込んだ。

「あなたは虐められて、青春を無駄に散らしている。なのに、あなたは黙ったまんまだ。黙ったまんま、伯爵の仕打ちに耐えている。あなたの寛容さはどうして承認できるレベルを超えている。あなたはマゾヒストだ。ああクロティルド、僕にはあなたが判らない！」

ロイド子爵は悶絶せんばかりだった。

「ああクロティルド、僕はあなたが愛しくてならない。好きです、クロティルド。あなたをあの男の元には帰したくない。あなたのつらい暮らしを知りながら、あなたをそのままにすることなど、どうしてできようか。どうか、僕に縋ってください、クロティルド。そうすれば僕はあなたを全力で護ります。伯爵の仕打ち

からあなたを解き放つてみせます。どうかクロティルド、伯爵との暮らしに否やを云ってください」

ロイド子爵は、クロティルドを掻き抱いた。

「それでも、わたくしはブッカブルク伯爵の妻ですわ」

クロティルドはごく落ち着いた口調で表明する。ロイド子爵はそんなクロティルドの冷静さにますます悶えた。

「だから、どうしてそうなんだ、クロティルド！ 伯爵の元で今のまま、暮らして行くと云うことは自分の人生をあきらめることだ、自分の人生を棄ててしまうことだ。僕を選んでください、ああクロティルド！」

掻き抱かれたままのクロティルドは穏やかにうち笑み、ロイド子爵の頭を包み込んだ。

「わたくしならもう善いのですよ、ロイド様。わたくしは過去に生きる女です。わたくしのこととはどうかお忘れくださいまし。あなた様はまだ若くておいでです。どうかわたくしの他に可愛い方をお見つけになって、その方と未来を生きてくださいまし」

「ああどうして判って呉れないのです？ 残酷なひとだ。ああ！」

最後のところはことばにならなかった。大きく呻いたロイド子爵はそのまま痙攣しはじめ、倒れた。

ロイド子爵は、悶死した。

「おやすみなさいまし、ロイド様。そして、さようなら」

クロティルドはロイド子爵の亡骸をそと横たえて、コンパートメントを後にした。

そのまま汽車はロイド子爵の亡骸を乗せて、走り出した。ロイド子爵の死を人々が知るのは、今しばらくあとのことになる。

ある事件。そうあの忌まわしい事件。僕は六年、花ちゃんの中二だった。思考がスリッブしそうになるのをかろうじて押し留める。その時、まるで天啓のように間奏が終わり僕はあわててマイクに飛びついた。話はそこまでで中断した。

2

それから、僕と冴子先輩は急速に仲良くなった。冴子先輩の私服は——これは凄く意外なことだが、パンクロック系なのだ。ポトムスに鉾がついているなんて当たり前。時には、ショートカットのウィッグを被っていたりもする。もっともそれは冴子先輩がカラオケで歌う曲を考えると当然なのかも知れない。僕たちはよくお茶や食事に行くようになった。それからカラオケ。僕たちはまた、映画友の会と云う会を結成した。これは都内の主な映画を出来るだけ多く、出来ればレディースデイに——これは勿論冴子先輩の提案だ、観て、後から合評会も行う。と云っても、食事を摂りながらなどの簡単なもののだが。

友の会一回目の今日は、金曜日なので、シネスイッチ銀座のレディースデイに行く。

「大人二枚」

「大人二枚ですね。千八百円になります」

冴子先輩が受付でそう云うと、窓口の女性が笑顔で応じる。冴子先輩は一瞬怪訝そうな表情をして僕の方を振り返ったが、僕が何の躊躇いもなく千円札を出すのを見て黙ってそれを受け取った。

「何時もあの手で入っているの？」

劇場内に入ったところで、冴子先輩は悪戯っぽく僕の貌を覗き込んだ。

「何のことですか？」

僕は空とぼけた。冴子先輩は短く云う。

「レディースデイ」

「ええ、まあ」

僕の外見は非常に中性っぽい。私服だと、100%女の子に見られる。それで、レディースデイも行けると云う訳だ。冴子先輩はそのことを云ったのだ。

*

今日は、職場の女性陣とランチをした。気怠い日曜の午後。

「馨くんで、そうしていると女の子にしか見えないよね」

朋美先輩が云う。

「ほんとよねえ」

田中さんと田村さんが異口同音に同意する。すかさず冴子先輩が口を開く。

「こいつ、映画館のレディースデイとか、女性料金で入るのよ」

みんながどっと笑った。

「だって、金欠なんですよ」

僕は笑って見せた。

「でも、本当に可愛いよね」

朋美先輩がまた云う。

「ありがとう御座います」

「お姉さんとかいないの？」

田村さんがしげしげと僕の貌を見た。

「いますよ。二つ上」

僕は、動悸がしてくるのを感じていた。

「相当な美人だろうな、見てみたい」

朋美先輩がはしゃぐ。僕は、くらくらしながら考える、大人になった花ちゃん。はしゃぐ女性陣をよそに僕は席を立った。

「お手洗いに行つてきます」

冴子先輩が、僕をじっと見ているのが判ったが、それどころではない。僕はあわてて洗面室に駆け込んだ。だが、そこには更なる悪夢が待っていた。鏡。これが大人になった花ちゃんの姿だろうか。僕は震える手でビルケースを取り出し、レキソタンを六錠口に放り込んだ。それでも、目の前の鏡から眸を逸らすことができない。花ちゃん。これが花ちゃん。鏡には青白い貌の女の子が映っている。少しウエーブの掛かった長めの髪、茶色い眸。記憶の中の花ちゃんは、もっと凛としていた。そのイメージを鏡の像に加えてみる。そうすると立派に生きている仕合わせそうな女性が立っていた。僕は、洗面台に手をつく。泣きそうになるのを必死で堪えた。大人になった花ちゃんなんて想像してもみなかった。だけど、これが現実だ。花ちゃんは夭折し、僕は暢気に生きている。

あとは、デザートのみだったので、なんとか耐えることができた。話は流れていて、僕の姉に触られることはなかった。デザートは楕円形のミニトアイスクリームとバナアイスクリームが並んでいるものだった。

た。ミニトアイスクリームは僕の大好物。少し気持ちが和んだ。

「しかしみんな私服だと、印象随分違うわよね」

田村さんが改めて一同を見渡した。

「ほんとですよね」

同意した朋美先輩だったが、しかし、会社と一番印象が変わらない。清楚な感じの白いワンピースにピンクのふんわりとした色合いのカーディガンを合わせている。

逆に会社での印象と最もかけ離れているのが田村さん。会社では、田村さんとセットな感じなのだが、今日の田村さんは違う。田村さんが派手なおばさんロンT——この云い方もPCでは無い、にジーンズなのに対して、田村さんは上から下まで一部の隙もなく、全身レストローズなのだ。ザ・フェミニンと云う感じなのである。年齢を無視したその「女装」はフェミニンを通り越し、滑稽でさえある。

だが、その滑稽さは自分にも通じるものであることを、僕は知っていた。僕の格好はと云えば、水色のT襯衣の上に水色とアイボリーの少しくすんだ色のギンガムチェックのロングパーカーにジーンズ。だけど、僕にとって一番驚きなのは、冴子先輩の服装だ。冴子先輩は、毒気のないカジュアルスタイルと云った感じだ。いつものバンクロックは何処へやら、濃いブルーのロングT襯衣の上に同系色の半袖を重ねている。何とポトムスは鉾のないジーンズだ。

*

「意外ですね。その格好」

みんなと別れて、ふたりきりになったところで僕は云った。駅近くのカフェに入りなおしていた。

「何が？」

「冴子先輩が普通の格好をしている」

僕が云うと、冴子先輩がくつくつと可笑しそうに笑う。

「だって。誰にでも、何時でも素を見せられるって訳じゃないのよ」

それは何気なく放たれた言葉だったが、僕の心に沁み込んだ。素を見せて呉れているんだ。それは意外な驚きでもあり、うれしくもあった。ほんわか温かい心持ちになった。冴子先輩はカフェラテ、僕はココアを注文した。僕はココアを一口啜った。甘い。僕は何時も思うのだが、ココアは直接血液になるような気がする。と、僕にそんなことを考える間を与えないかのように、計ったようなタイミングで、冴子先輩は口を開いた。

「そろそろ、話して呉れても善くない？」

「何を？」

「リストカットのこと」

急に口の中が渴いた気がして、僕はココアをまた一口啜った。

「そうですね」

そして、溜め息と共に言葉を吐き出す。それは全然介意わない、僕は自分に云い聞かせた。僕に素を見せて呉れているらしいこのひとに僕は僕の生を見せることを少しも躊躇わない。だけど、嗚呼、どうすれば。どうすれば僕の暇をこのひとに見せられる？ 一体、何から話せば。

承諾はしたものの、ことばを探して、考えあぐねている僕の様子に、冴子先輩は理知的な口調で話しはじめた。

「あたしも見たとおおり、君の暇は、古いものだった。少なくとも高校から大学にかけて、と云ったところ違う？」

僕は、内心、冴子先輩の観察眼に、舌を巻いていた。それで、素直に同意した。と、当時の記憶が甦る。莫迦みたい、自分の左手首に幾筋もの紅いラインを引き、溢れ流れ出す血を眺めてはひとときの心の均衡と安心を得ていたあの頃。

「ええ、そのとおりで」

僕の同意に、冴子先輩は莞爾とし、先を続けた。

「そして今は切っていない」

「ええ」

今度は自信を持って、応えることが出来た。

「でも、君の中では終わっていない。問題は解決していない。違う？」

僕は眸を見開く。思わず、冴子先輩を見つめる。なんて聡いひとなのだろう。

「ええ。」

「それに、それには、お姉さんのことも関係している。違う？」

僕は、思わずビクツとした。花ちゃん。

「桐谷？ だいたいどうぶ？」

冴子先輩が心配そうに覗き込んでくる。手を握られた。そうされて見て、僕は初めて自分が小刻みに震えていることに気づく。

「やめた方がいいならやめるわ」

「いえ、続けましょう。冴子先輩には知っていてほしいから」

冴子先輩は、なおも慎重そうな表情で僕の方を眺めていたが、やがて、莞爾とした。

「話して頂戴」

「姉は花乃と云う名前でした。美少女で何時も凛としていて近所でも評判が高く、菅手の花と呼ばれていました」

ぼくは、恐る恐る話し始めた。

「菅手の花？」

「ええ。僕の故郷は菅手と云うんです。それで、僕が小六、花ちゃんは中二の冬にそれは起きたんです」

あの忌まわしい事件。

「それ？」

「ある日、僕と花ちゃんが帰っていたら、大学生の五人組に待ち伏せされていた。男たちはどうも花ちゃんの評判を知っていたようで、狙っていたみたいです。僕たちは、あつという間に男たちに取り囲まれ逃げ場をなくした。そして、男たちが襲いかかって来たんです。そこから記憶はあいまいで、所々しか覚えていません。僕は、我武者羅に抵抗した。だけど、気がついたら地面に横たわっていて、花ちゃんが輪姦されていた。僕は、助けられなかったんです」

僕は一気にしゃべった。一気にしゃべらないととも口にすることはできなかった。冴子先輩は余計な口を挟まず、穏やかに聞いて呉れた。

「それから、悪夢のような日々でした。マスコミに家を取り囲まれてインタビュア攻めに遭うし、近所の人は陰で花ちゃんのことを手折られた花と噂しながら腫れものを触るように僕たちを遠巻きにしているし」

「酷い」

冴子先輩が遠慮がちに口を挟んだ。

「それでも花ちゃんは相変わらずでした。長い黒髪をポニーテールに結って、相変わらず何時でも凛としていた。僕は、事件の記憶はほとんど取り戻せなかったけれど、そんな花ちゃんにずいぶんと励まされました。

『わたしたちは何も悪いことはしていないのだから聲も堂々としていればいいの』花ちゃんは口癖のように僕にそう繰り返しました。犯人は捕まらなかったけれど、僕はそうやって段々事件のことを忘れて行ってしまうところでした。でも、三年後」

僕は急に言葉を切った。これ以上は無理だと思った。

「すいません。今日はここまでで勘弁してください」

僕は靴の中からビルケースを取り出した。震える手で蓋を開けようとする。その手を冴子先輩が押さえた。「そんな不健康なものはやめなさい。先刻もトイレで飲んで来たんでしょ？」

僕は困って冴子先輩を見た。冴子先輩の云うことは尤もだ。だけど、今の僕にはレキソタンがどうしても必要だ。そんな僕の様子を他所に冴子先輩は声を明るくして云った。

「そんなものより、いいところに行きましょう」

*

僕たちが行ったのはカラオケだった。僕たちはそれから五時間近くシャウト系の曲ばかりを歌い続けた。「ストレスの発散にはこれが一番なのよ」

驚くべきことにカラオケが終わる頃には、僕の心は平衡を取り戻し、もはやレキソタンを必要としないかった。

*

家に帰って、僕は自分のブログ（花折と云うハンドルネームを使っている）にこんな詩を書きこんだ。
「あなたが鈴を呉れました。
猫にでも何でもわたしは鈴をつけるの、と笑い乍ら。
それならば僕は僕に鈴をつけよう。
知らぬ間に、失くしてしまわぬよう。」

3

僕と花ちゃんは一緒に帰っていた。花ちゃんの高校と僕の中学は隣り合っているのだ。僕は毎日、花ちゃんの高校の前で花ちゃんの下校時間を待つ。

「お待たせ、馨」

「花ちゃん」

僕たちは歩き出した。

「今日ね、男女共同参画のデイベートをしたんだ」

僕は何時ものように学校での出来事を花ちゃんに話した。

「男女共同参画のデイベート？」

「うん、ほんとうの意味で男女共同参画を実現するにはどうすればいいのかって云う」

「ほんとうの意味で？」

「うん、意識の中までと云うか」

花ちゃんは莞爾とする。

「意識の中までは難しいわね。わたしもそう云うレポートを書いたことがあるわ」

「どう云うの？」

「ほら、うちってお父さんが結構料理するでしょ？ 表面上は男女共同参画のようでしょ？ でも、意識の中まではできてないと思うのよ。やってやっていると云う意識があると思うのよ」

「たしかにね」

「でも、勿論やらなくてもやる方がいいに決まっているけれどね。やっているうちに意識も変わってくるかも知れないし。わたしはお父さんにそこを期待してるの」

「そっか」

僕はすっかり感心して花ちゃんを眺めた。黒髪のポニーテールが揺れている。

川に差し掛っていた。紅い橋。橋の真ん中辺りまで来たところで僕は目の前に五人組が立ちふさがっていることに気がついた。不穏な様子だ。

「花ちゃん」

不安に駆られた僕は花ちゃんを呼んだ。花ちゃんもハツとして足を止める。

「馨。離れないで」

囁くように花ちゃんが云う。

「よう、花乃」

五人組の男たちのひとりが野卑た声を上げる。

「遊ぼうぜ」

「メリークリスマス、律！」

全身、ピンクのスパンコールドレス姿のユキノリも声を合わせる。ドラァグクイーンだった。ふたりはお子様向けシャンパンのグラスを合わせる。りん、と音が響いた。

「律は最近はどうしていたの？」

「相変わらずダブルスクールが忙しかったよ」

律は将来、ヴォーカルのスタジオミュージシャンになりたいと思っていて、夢のために大学とは別に、歌の学校にも通っているのだ。

「どんな感じのこと、やっているの？」

「躰と心を開いて、声を投げる」

「ふうん、相変わらず宗教っぽいことをするのね」

「うん、進化した人間になって、芸術を声に持ち込む」

「あたしは難しいことは判らないけれど、でも、律の声を聴いていたら、【芸術を声に持ち込む】は判るような気がするわ」

ユキノリが想いの外、神妙に云った。律はその黒目がちな眸を吃驚したように見開いた。

「ありがとう。でも、わたしなんてまだまだなのだよ。自意識の膜があつてね、」

ユキノリが不思議そうに繰り返す。

「自意識の膜？」

「うん、何もない虚空に声を投げたいと思うのだけれども、自意識の膜みたいなものが躰を覆っていて、自分の躰と心を空洞にできないのだよ」

「ああ、それなら何か、判る気がするわ。ほら、律ってお酒、飲んでも乱れないじゃない？ 自分の外郭が決まっ

ていると云うか、定型なのよ」

律は大変に驚いていた。ユキノリが云ったことは、そのまま、律が悩んでいることだった。

「ユキノ、わたし、どうすればいいかな？」

律は思わず、ユキノリに縋った。泪が落ちた。

「あたしに訊かれても困るけど、たとえば律が可憐さんには抱かれるのに先輩には抱かれることができないと云うのもそのひとつかなって思うのよ。律は自分のイメージがきっちりあって、それを崩したくないように見えるのよ」

「そっなの」

ああ、ユキノはわたしのこと、見ていてくれるのだな。律は殆ど感動していた。律は、イメージ戦略だと思っているが、自分がこう見えると云うイメージを——それが現実の律とは、違っても——放置するところがあつた。

「一番いいのは、身も世もなく誰かを好きになることね。それこそ外郭なんて取っ払ってしまえるくらい」

「それはイメージ戦略を越えたところってことよね？」

「もちろん。そこを越えなきゃ意味なんてないわ。律は進化してどうなりたいの？」

「だったひとつの真実を掴みたいの」

「名探偵コナン？」

茶化しておいてユキノリは、ふっと真面目になる。

「だったひとつの真実って？」

「それが判ったら人類全体が向上できるような、何か善き美しきもの。たぶん、いろんな人がいろんなやり

方でそれを目指していると思うのよね。ヨガとか、哲学とか、演劇とか。たったひとつの真実がある山をいろんなアプローチで登っているのだと思うの、みんな。わたしはそこに直接アプローチできるようになりた。進化すれば直接アプローチできるはずだと思ってるの」

「なんとなく判るような気がするわ。直接アプローチできるようになれば、人類全体が向上すると云うの」「ほんとう？」

「ええ。あたしは思うのだけど、フロイトの氷山のモデルってあるでしょう？ 意識／無意識の。あれの海面下へのアプローチってことでしょうか？」

フロイトの初期の理論は無意識の理論である。心を氷山として、意識は海面に顔をだした氷山の一角であり、水面下に隠れた大部分が無意識であると考えたものだ。無意識には、様々な欲動や情動が抑圧されているとした。

律はすっかり嬉しくなっちゃった。

「まさにそうなの！ あの海面下の部分は海の水に浸かっているわけでしょう？ 海の水を通して、人類全体の無意識は繋がっているのだとわたしは思うの」

「なるほどね。だから、律ひとりの進化が人類全体の向上になると云うわけね。無意識が海の水を通して、人類全体に繋がっているわけだから」

「そう！ そうなの。ユキノがわたしのことを感じてくれて、嬉しい」

律は幾分、熱に浮かされたようになりながら、云った。

「あたしも律が目指しているところが判って、嬉しいわ。ますます応援しちゃう」

ユキノの言葉も勢いを持つ。

「ありがとう」

云いながら律は、普段は感じないはずの酩酊をその躰に感じていた。

5

デパートの地下、熱気に満ちたチョコ売り場で律とユキノリは、チョコレートを先刻から大量に試食している。

ふたりは、一見すると似合いの恋人同士に見える。ただ一点、白哲の美青年然としたユキノリが黒のスタジャンとデニムを重ねて、水色のオーガンジーのパニエスカートを穿いている点を除けば、だ。

「生チョコ、美味しいけど。郵送はね、」

律は長い黒髪の異常なまでに少女めいた外見で眩く。丸襟のクラシカルなワンピースを着た彼女は、実はとても小柄なのだが、小造りな顔立ちのため、全体するとバランスがいいように見える。

「行けない距離でもないのだし、持って行ってあげればいいじゃない」

ユキノリが答える。田辺先輩が働く工場は千葉にある。律やユキノリが住んでいる大学のある市は、はずれとは云え、一応東京なのだから、ユキノリの云うように、行けない距離ではないと云うわけだ。

「ヤダ。面倒なもの。それに、わたしには遠距離くらいが善いみたい」

「田辺先輩も可哀想に」

「同感。だいたい、わたしを好きなんて気が知れないのよ」

「あたしはそうは思わないけど？ 尤も、田辺先輩みたく、律に幻想は抱いていないけれど。こんなに小さ

せめて存在を大気に刻もうと云うのか
それとも定めを呪うのか

此処、此処、時、時……

時
時

啼く蟬の圧力に 抗う術もなく
夏の夜 深く

水^い瓜^か 關^せ
關

熟れた水瓜の匂いがする。
この暑さ。この湿気。
空気がぶわんと水分を含んで、
甘い匂いで纏わりつく。

熟れた水瓜の匂いがする。
闇も。人も。僕さえも。
指先までが甘い匂いを放っている、
そんな気がして。

振り切るように自転車漕ぐ。
ペダルが重い。
ほとんど水に選りかけた、
熟しきった甘い水瓜。
世界が腐乱しかけている。

ホラ、臨界点ガ。くる。

熟れた水瓜の匂いがする。

腐乱した屍体のよう。

甘ったるく暑い闇に囚われて、
すべてが熟んで、倦んでゆく。

水瓜ハ今、臨海ニ達シタ。

熟シキツテ、はじけた。

ソシテスベテガクズレオチル。

甘イ汁、流レダス。

僕も世界も人も闇も自転車も

明るい電気店も宮殿めいたカラオケボックスもラーメン屋さんのソフトクリームも
均しく熟んで、腐乱して

どろり、溢れる夏の夜。

わたしのいのち

毎日毎日熱を出す。

毎日毎日^{からだ}熱が怠い。

^{からだ}熱が云うことを聞いてくれない。

意識に^{からだ}熱がついていかない。

こんなに辛くてこんなにきつくて、

それでも命は続いていく。

もういつぞ死んでしまえたほうが楽なのに。

わたしは生き続けている。

怠い^{からだ}熱に、停滞してゆく意識。

懸命に毎日をこなしている。

こんなになにもできないのに、この日々が続くのだろうか。

わたしはたぶん、働けない。

時折、社会に近づいてはみるのだけど、

そのたびに余計にからだを弱くするばかりだった。

だから独りでは生きていくことすらできない。
「普通」に結婚して家庭を持つような真似も絶対にできない。

なのにどうして生きているのだろうか。

わたしは自分の生が不思議でならない。

死のほうがいつても身近にあるのに。

それでも、生きてしまう。

そして、書きたい。

何がわたしをそこまで駆り立てるのだろうか。

わからない。

でも、書きたい。

生きているのが辛いのに、書きたい。

いや、だからこそ書きたいのだ。

何を？

それすらもまだわからない。

でも、わたしにはコトバしかない。

はつきりしているのはそれだけ。

こんなにも苦しいのに、だからまだ、死ねない。

動くこともままならなくなるこの^{からだ}躰。

書きたいのに、思うようにならないこの^{からだ}躰。

わたしは^{からだ}躰を持て余す。

^{からだ}躰と意識がばらばらになる。

意識だけは自由にどこまででもゆける。

なのに、それを書き残すことすらできない。

書くために生きているのに、

わたしの生は、書くことすらわたしに許さない。

ハタチまでは生きられない。

そう信じ込んでいた。

なのに、わたしはまだ生きている。

これからどうしたらいいのだろうか。

この^{からだ}躰とどうやって付き合っていけばいいのだろうか。

どうやって書いていけばいいのだろうか。

途方に暮れたまま、わたしは倒れ込む。

そうして起き上がれない。

その繰り返し。

弱すぎる躰と、強すぎる意識。

折り合いの付け方がわからない。

こんなに永いこと付き合っているのに。

コントロールの仕方が分からない。

こんなんちゃ、生きていけない。

その確信ばかりが強くなる。

生きていかなければ書けない。

その焦りばかりが強くなる。

月に向かってわたしは祈る。

お願いです。助けてください。

わたしを救い出してください。

書かせてください。

何もできなくてもいい、だから書かせてください。

その力までは奪わないで。

わたしを殺さないでください。

わたしに、わたしを殺させないでください。

月は何も応えない。

それでもわたしは祈りつつける。

涙に暮れながら、祈りつつける。

お願いです。どうか、わたしを助けてください。

月はただただそこにある。

わたしはそれに焦られるまでに懂れる。

ただただそこにある。そしてただただ書く。

それだけでいいんです。

どうかわたしに、その力をください。

たったそれだけでいいから。

しあわせなんて、望みはしないから。